W.J.グッゲンハイム『日本への爆撃機』とスイスの「精神的国土防衛」

曽田　長人*

序

ヴェルナー・ヨハネス・グッゲンハイム（Werner Johannes Guggenheim 1895-1946年）は、20世紀に活躍したスイスの劇作家・翻訳家である。彼は約10本の劇を残したが、その多くは今日では忘れられ、スイスにおいても演劇に関心のある人を除けば、彼の名前を知る人は少ない。むしろグッゲンハイムの名前は、フランス語圏スイス出身の作家シャルル・フェルディナント・ラミュ（Charles Ferdinand Ramuz）の作品をドイツ語へ翻訳した[1]翻訳家として、今日まで残っているようである。グッゲンハイムが残した劇の中で日本と関係し、スイスにおいて近年に至るまで半世紀近く上演され[2]、私見では未だに現代性を失っていない作品が、『日本への爆撃機』（Bomber für Japan 1937年）である。この作品はスイスにある架空の航空機メーカーで作られた戦闘爆撃機の、日本への輸出の是非をめぐる、同社の関係者内での確執をテーマとしている。

『日本への爆撃機』は文学史上、「時事劇」（Zeitstück）と呼ばれるジャンルに分類されている[3]。「時事劇」とは同時代の出来事をテーマとし、観衆の啓蒙と挑発を目的とした劇の総称である。1920年代のエルンスト・トラー（Ernst Toller）『どっこい、おいらは生きている』から40年代のヴォルフガング・ボルヒェルト（Wolfgang Borchert）『戸口の外』を経て60年代のロルフ・ホッホフート（Rolf Hochhuth）『代理人』等の作品に至るまで、ドイツ語圏の舞台で一世を風靡した[4]。『日本への爆撃機』の背景となっている同時代の主たる出来事とは、1930年代後半、日本・ドイツ・イタリアという枢軸国が世界各地で繰り広げつつあった様々な軍事行動である。スイスはこうした世界の動きに、矛盾した対応を取らざるを得なかった。つまり一方でスイスの武器輸出額は、1935年の300万スイス・フランから1938年の4000万スイス・フラン（以下フラン）へと増加した[5]。他方1930年代

＊　人間科学総合研究所研究員・東洋大学経済学部

1　La Garçon Savoyardの翻訳等。ラミュの肖像は、200スイス・フラン紙幣に印刷されている。

2　詳しくは、「Ⅲ．受容」を参照。

3　Stern, Martin : Das schweizerische Zeitstück 1933-1945. Notizen zu einer vergessenen Gattung, in : Kein einig Volk. Fünf schweizeirische Zeitstücke 1933-1945, hrsg.v.Ursula Käser-Leisibach u. Martin Stern, S.511.

4　Ebd., S.507.

のスイスにおいては、上で触れたスイス市民階級にとっての外患に触発され、「精神的国土防衛」（Geistige Landesverteidigung）の必要が唱えられた。「精神的国土防衛」とは、周囲をドイツ、イタリア等の大国に囲まれたスイスにおいて当時、主張された、「スイスの特性を強調し、（左右の－引用者注。以下、引用文内のカッコは引用者による）全体主義的な独裁政権に対して自らを守る姿勢」[6]の総称であり、これには様々な変種が存在した。『日本への爆撃機』の主人公も作品の中で、スイスの国土防衛の重要性（S.10.以下、引用文の後のカッコ内のページ数は、『日本への爆撃機』[7]の出典を指す）、「スイスに（中略）精神的な力以外の力はない」（S.55）ことを訴えている。

スイスの「精神的国土防衛」は第二次世界大戦後、東西冷戦の終了に至るまで、ドグマ的な色彩の濃い反共産主義としてスイスの一種の国是ともなった。しかし『日本への爆撃機』において描かれた「精神的国土防衛」は、これとかなり異なった姿を示し、独自の問題性を露呈しているように思われる。それゆえ本論においては『日本への爆撃機』を検討し、同作に表れたスイスの「精神的国土防衛」の内容、同作の特徴、意義について考察する。考察の順序として著者グッゲンハイムの略歴（Ⅰ）、『日本への爆撃機』のあらすじ（Ⅱ）、受容（Ⅲ）をまとめ、作品の分析（Ⅳ）を行う。

Ⅰ．グッゲンハイムの略歴

グッゲンハイムは1895年、スイス東部の町ザンクト・ガレンにおいて裕福なユダヤ系工場主の長男として生まれた。チューリヒ大学とローザンヌ大学においてドイツ文学を修め、1919年にはローザンヌ大学で博士号を取得している。博士論文のテーマは、ドイツ語圏とフランス語圏スイスの意志疎通に努めたスイスの作家「カール・シュピッテラーの世界観」であり、スイスの愛国者としての後年のグッゲンハイムの姿を予示している。1920年代にはベルリンにおいて脚本家としての研鑽を積み、ブラウンシュヴァイク、ザンクト・ガレンの劇場で舞台監督を務めた。1931年から46年にかけてはスイス劇作家協会会長という要職に就いた。そして1930年代には、外国の作品が上演されることの多かったスイスの劇場で、スイス人作家やスイス・ドイツ語による作品の上演へ向けて力を尽くしている。1934年以降は翻訳にも携わり、先に触れたラミュ、フランソワ・モーリヤック（François Mauriac）等によるフランス語の作品をドイツ語へ翻訳している。1937年12月には、本論文が取り扱う『日本への爆撃機』が成立した。同年ナチス・ドイツの人種理論を批判する『人間への教育』が完成するが、上演を引き受ける劇場が見つからず、同作の初演はナチス・ドイツの敗色の濃い1944年11月へ持ち越された。1946年にはスイス・シラー財団賞を受賞し、同年ベルンで亡くなっている。

---

[5] Anhang. Werner Johannes Guggenheim（1895-1946）, in : a.a.O., S.471.

[6] Mattioli, Aram : Zwischen Demokratie und totalitärer Diktatur. Gonzague de Reynold und die Tradition der autoritären Rechten in der Schweiz, Zürich 1994, S.241.

[7] 引用は、Guggenheim, Werner Johannes : Bomber für Japan, Zürich 1938 から行う。

Ⅱ.『日本への爆撃機』の内容

本章においては、上で触れた「時事劇」という性格を考慮し、時代背景を補足しながら同作のあらすじを述べる。『日本への爆撃機』は1937年10月、スイスのある産業都市が舞台となり、全5幕からなる。台本はチューリヒのオプレヒト出版社から1938年に刊行された。同社は、ドイツからスイスへ亡命した作家の作品を数多く出版したことで有名であった。

『日本への爆撃機』の主な登場人物は、以下のとおりである。カール・ゲオルク・ナスト大佐（以下カール）は60歳過ぎで、ヴェヒター＆ナスト発動機－飛行機製造株式会社（以下ナスト社）の経営委員長を務める。アンナ・ヴェヒター＝ナスト（以下アンナ）はカールの妹、ゲオルク・ヴェヒター（以下ゲオルク、26歳位）はアンナの息子でナスト社の社長の任に就いている。マルグリット・ヴェヒター（以下、愛称でグリット）はアンナの娘つまりゲオルクの妹、フリードリヒ・ボルン法学博士（以下ボルン）は弁護士かつグリットの婚約者である。エルンスト・ペラン（以下ペラン）は財政銀行の社長、ハイジ・ゲルバー（以下ハイジ）はゲオルクの秘書を務め、彼の恋人である。ナスト社で働くプファイファー、エルプという2人の労働者も登場する。

ナスト社は、アンナの亡き夫オスカー・ヴェヒターおよび彼女の兄カール・ナストが設立した同族経営の会社であり、長老株のカールを筆頭に彼の妹のアンナ、甥のゲオルク、姪のグリット、さらに一族外の経営コンサルタントとしてペランという計5名が同社の経営委員会に加わっている。

第1幕はナスト社、管理棟の会議室が舞台。ナスト社の経営委員が、委員会が開かれるため会議室に集まっている。議題に入る前、ギャングに譬えられた日本、ドイツ、イタリア、ソ連が世界を混乱に陥れていること、彼らの計略から逃れるためには細心の注意が必要であること等が話題となる。こうした発言の時代背景として、以下の出来事が特筆される。1935年にヒトラーは再軍備を開始し、翌年にはラインラントにドイツ軍を進駐させ、戦間期の平和を保証したロカルノ条約に無効宣言を下した。ほぼ同じ時期、イタリアのエチオピア侵攻（1935-36年）、スペイン内戦（1936-39年）等が起き、国際的な安全保障が失われた。アジアにおいては盧溝橋事件が1937年7月に勃発し、正式の宣戦布告なしに戦火は中国各地へと広がりつつあった。

会議の議題は、ナスト社が新たに開発した戦闘爆撃機ＷＮ7、25機の日本政府への納入の是非について。納入にカールとペランは賛成、ゲオルクは反対している。ゲオルクが納入に反対する理由は、ＷＮ7をスイスの国土防衛のために開発した、という点に留まらない。

> 日本のような国に現在の時点で飛行機を納入することは、私の信念と矛盾します。（中略）恥知らずの奇襲を行い、法外で抑制の効かない侵略政策によって世界の平和を脅かし、英米、さらに私たちの全西側の文明・文化にとって危険となる国（日本）が問題となっています。（中略）というわけで、私はこの契約を結び、日本という国へ航空機を納入することを拒否します。たとえ私たちの会社がそれによって経済的な損失を蒙る危険を冒してもです。（S. 10 f.）

1937年8月、第二次上海事変が勃発し、日本海軍は同月、九州の基地から南京への渡洋爆撃を開始した。日本海軍の記録によれば12月13日の南京占領にいたるまで、50数回の空襲が行われ、参加延機数は900余機、投下爆弾は数百トンに及んだ。南京市長馬超俊の報告によれば、8月15日から2ヵ月の間、市民392人が死亡、438人が負傷、破壊された家屋はおよそ700～800戸に及んだ[8]。これは交戦国住民の戦意喪失を狙う、第二次世界大戦中に枢軸国、連合国を問わず大規模に行われる戦略爆撃の先駆けであった。中国兵を匿う嫌疑を受けたイギリスやアメリカの砲艦も、日本海軍による空襲の被害を受けた。その結果、欧米の多くの国において対日感情は悪化した。ジュネーブで開かれた国際連盟総会は1937年9月イギリスの提案を容れ、日本の中国都市爆撃非難決議を採択した。しかし制裁の実効を伴わなかったこともあり、日本海軍は爆撃を継続した。スイスで第二次上海事変の経緯に関しては、国際面の報道について定評のある『新チューリヒ新聞』（Neue Zürcher Zeitung）において連日、スペイン内戦の経過と並んで詳しく報道されていた[9]。上で引用したゲオルクによる日本批判は、グッゲンハイムが触れていたであろうスイスの大メディアの報道が情報源となっていたことが推測される。

ゲオルクの主張に対してペランは、会社の経営は経済的な原則に則って行われるべきであり、人倫的な根本条項を適用すべきではないと説く。さらに今回の大量受注を引き受ければ会社の株価や外部の信用が上がり、逆に大量受注を断れば第三者に訝しく思われることを警告する。しかしゲオルクは、スイスの連邦軍務省からＷＮ７を購入する確認を取ったので、日本へ同機を売る必要はないという。

これに対してカールは、スイス政府へ売ることができるＷＮ７はせいぜい10機程度であり、今回の受注は労働者に仕事を与え、景気は世界恐慌後、回復気運ではあるがまだ危険があるので、稼げる時に稼ぐべきであるという。しかしゲオルクは、「秩序、品行方正、清廉」（S.17）という根本条項に従うべきことを主張し、母のアンナに次のように語りかける。

> そこには、宣戦布告なしに隣国を奇襲する（日本という）国があります。この国は、厳粛に押印され、誓約を立てられた条約や協定を破ります。隣国へ奇襲をかけ、この隣国に対して容赦なく粗野で残酷な殲滅戦争を行い、軍隊や武装した敵に対してではなく、無防備で保護を欠いた大都市に対して－この町では何千人もが犠牲者として虐殺されるのですが－、無防備で武器を持たない保護を奪われた住民に対して、毒ガスや恐るべき爆弾を用いた戦争を行うのです。この戦争は、その卑劣さによって世界の良心を挑発します。お母さん、私たちが日本人に引き渡す戦闘爆撃機が何のために使われるのか知っていますか、あなたは子供殺しの共犯者になりたいのですか？（S.18）

8　笠原十九司『南京事件』（岩波新書、1998年）pp.40-41.

9　これを筆者はバーゼル大学図書館所蔵 Neue Zürcher Zeitung のバックナンバーによって確認した。

ナスト社が開発したＷＮ７は、「いわゆる急降下爆撃機」（Sturzbomber, S. 10）であるともいわれている。上の引用でゲオルクが語るように、確かに日本海軍は、通常の爆撃機である96式陸攻に加えて、戦闘爆撃機の96式艦攻や急降下爆撃機の96式艦爆による攻撃を当時、中国に対して行い、南京において日本軍は毒ガス弾を投下するという情報が流れていた[10]。しかし上の台詞を1930年代末期に聴いた注意深い観衆は、作者の分身たるゲオルクが批判の対象とした国が果たして日本だけなのか、疑いを抱いたことが想像される。なぜなら毒ガスを用いた戦争を実際に行ったのはエチオピア侵攻におけるイタリア軍（1935年12月～1936年3月）[11]であり、「戦闘爆撃機」（Kampfflugzeug）や急降下爆撃機によって「恐るべき爆弾を用いた戦争」を行ったのは日本軍のみならず、スペイン内戦の際フランコ側を支援したドイツのコンドル軍団であったからである。後者について、ドイツの戦闘爆撃機ドルニエ Do 17 や急降下爆撃機ヘンシェル Hs 123 が実戦に投入された[12]。

作中ではすでに上の台詞に先んじてヒトラーがペランとカールの友人であることが語られ（S. 8 f.）、ナスト社がナチス・ドイツと深い関わりを持つことが示唆されていた。1987年ルツェルン市立劇場において『日本への爆撃機』が上演された時、グッゲンハイムの妻で女優であったウルズラ・フォン・ヴィーゼ（Ursula von Wiese）へのインタビューが行われた。彼女はこのインタビューの中で、グッゲンハイムが作中の日本によってドイツを意味したことは、観衆によって理解された、と語っている[13]。

こうしてグッゲンハイムは日本の姿を借りて、スイスによる非人道的な国一般、特にイタリア、ドイツも含めた当時の枢軸国[14]への武器輸出を批判していたと考えることができる。スイスにおいては1930年代の後半、武器輸出にまつわる様々なスキャンダルが明らかとなり、民間の軍需企業への統制をめぐる国民イニシアティブ案が発議される等、武器輸出の問題は世論の大きな関心を惹いていた[15]。

さてペランは、「国際的な広がりの中で世界全体がボイコットを行うのであれば、（ゲオルクの考えは）たいへん当を得たやり方ですね。しかしここは世界議会ではなく、私たちは世界の良心の代表者でもありません。世界の良心なぞ想像の産物に過ぎません。私たちの会社が（日本と）契約を結ばなければ、他の会社が喜んで（日本と）契約を結びますよ」（S. 18 f.）と警告する。

自らの道徳的な確信を披歴したゲオルクの熱弁に圧倒され、アンナとグリットも日本への爆撃機の納入に反対する。経営委員会は3対2で日本への爆撃機の販売を否決する。ペランは悔しがり、カー

---

10 笠原十九司『日中全面戦争と海軍　パナイ号事件の真相』（青木書店、1997年）p. 83. 毒ガス弾の投下は、実際には行われなかった。

11 Anhang, a.a.O., S.472.

12 もっとも歴史学的に確かなことをいうためには、上で触れた飛行機の種類がスイスのメディアで報道されていたか、グッゲンハイムがこうした情報に触れていたか、検証が必要ではある。

13 Gespräch mit Ursula von Wiese im Programmheft der Spielzeit 87/88, Nr. 7 des Stadttheaters Luzern, S.6.

14 s. Anhang, a.a.O., S.472. 1937年11月には、日独伊防共協定が締結された。

15 A.a.O., S.471.

ルも会議の結果に納得しない。会議の終了後、書記のハイジはゲオルクのところへやって来て、これからも続くであろう戦いへ向けて彼を励ます。そして「私たちの経済のあり方が、その内的な合法則性によって、人間的なあり方と容赦なく矛盾する」（S.23）ことを示唆する。

第2幕は、ペランが務める財政銀行の執行部事務室が舞台となる。彼は電話で世界中の株相場に関する情報を得、株の売買について指示を下している。そこへボルンが登場。ペランがナスト社の株は有望であると勧めたため、ボルンが同社の株を買っていたことが明らかにされる。二人の間での株相場についての会話。会話の最中、電話で同社の株価が下がったという情報が入る。同社の株価が今後もなお下落することが予想されるため、ペランは手遅れにならないうちに、ナスト社の株を売りに出すことをホルンに助言する。株価が下がりつつある理由として、ナスト社が日本からの戦闘爆撃機の発注を断る決断を下した点を挙げる。ペランは、株価の下落を防ぐための買い支えは功を奏さず、資本が有効に使われない会社は負けると語り、ゲオルクの道徳的な潔癖さを評価しつつも、彼が経済に疎いことを批判する。その場へグリットが現れる。ペランは、グリットが婚約者のボルンを救いたい気持ちを見透かし、彼女がゲオルクと相談し、彼に翻意を迫るよう促す。その結果ゲオルクが意見を変え、日本への爆撃機の納入に同意すれば、株価が上がるだろうという。ボルンも、中国人よりむしろ身近にいる彼を救うべきであるとグリットを説得する。彼女は兄ゲオルクへの愛情と婚約者ボルンへの愛情との間で引き裂かれ、当惑する。

第3幕の舞台は、ヴェヒター家の別荘におけるゲオルクの個人事務所である。ゲオルクは、ナスト社の異変を嗅ぎ付けた『新スイス・ポスト新聞』の記者からのインタビューに電話で応対している。グリットが来訪。彼女はゲオルクに、先日の経営委員会での考えを変えられないか彼に尋ね、その理由として、ボルンがペランに勧められ1株600フランのナスト社の株を大量に買い入れ、そのために払った資金の多くをペランに借りている点を挙げる。投機を好まないゲオルクは投機に関する話題に耐えられず、ボルンが株を買った動機が「労働や労苦なしに金を得ようと思った」（S.37）点にあったのではないかと詮索する。これに対してグリットは、ボルンは裕福な彼女に経済的に依存することを嫌ったため株に手を出したのだろうと、ボルンのことを弁護する。さてグリットは、日本への爆撃機の輸出についてゲオルクに翻意を迫るが、ゲオルクは自分の意見を変える必要はないこと、逆にグリットが経営委員会の場で、自分の意見に確信がなかったにもかかわらずゲオルクの側に与したことを非難し、株価下落の黒幕がペランであることを示唆する。直後のゲオルクと銀行家ヴュルフリンガーとの会話では、ペランがナスト社の株を1株380フランで売りに出したことが明らかになる。

ヴュルフリンガーと入れ違いに、ナスト社で働く労働者のプファイファーとエルプがゲオルクの所へ来訪。2人は、カールが彼らを労働者の代表としてゲオルクの下へ、日本との契約破棄に抗議するため寄越したという。2人は、労働者にとっては雇用が大事であり、もしも日本との契約を破棄すれば、労働者が解雇される危険があると訴える。これに対してゲオルクは「目下すぐさま雇用が減ることを恐れるような状況には見えません。（中略）私は現在の雇用を保つよう最大限努力すると約束します」（S.47）と答え、ベルンの連邦軍務省がナスト社の飛行機を発注する見通しを述べる。しかし

古参の労働者プファイファーはゲオルクの事務所の豪華な調度を見渡し、彼が財産家であることを指摘し、俸給の低下が労働者にとって何を意味するかゲオルクにわかるはずがないという。ゲオルクは労働者の心配事を十分、気にかけていると語り、むしろゲオルクの決定が労働組合員かつ社会民主主義者であるプファイファーの確信と矛盾しないことを納得させようとする。さらにゲオルクはプファイファーに対して、前にボルンがグリットを説得したのとは逆の論法で、プファイファーと同様の境遇にある中国人の労働者が、彼が製造に加わった戦闘爆撃機によって殺されて構わないのか、と問いかける。

プファイファーは、ゲオルクがメッセージを誤った相手に送っていると反論し、責任があるのは彼ではなく資本主義の体系全体であるという。しかしゲオルクは、プファイファーのように責任を非人格的な体系へと転移するのは安易であると考える。他方ゲオルクが兵役を共にした若い労働者のエルプは、労働者はゲオルクの意見に納得するだろうと語り、ゲオルクが労働者を啓蒙すべきことを説く。

エルプとプファイファーが退場した後、ハイジが登場。彼女はゲオルクに、「あなた（ゲオルク）は自分が属する社会層の中でどんなに孤立しているのか、全くわかっていないと思うわ」（S.55）と警告し、一人一人の人間は形式に対して無力であるという。しかしゲオルクは、外的な形式はそれほど重要ではなく、形式の中で働く精神こそ問題であると主張し、人間が決定の自由を持てば孤立せず、誠実な人間は誰でも自分の味方であると思えば、何も怖がることはないという。そして労働者の所へ行き、彼らの礼儀や清潔さへの感情、万人が生まれつき持つ正義の感情を強めたいと語る。

第4幕ではナスト社の管理棟、カール・ナスト大佐の事務所が舞台。ハイジが来訪。カールは、ゲオルクが労働者を味方につけ、危険な戦いへ乗り出そうとしていることを察知し、ゲオルクの婚約者であり将来ヴェヒター・ナスト家の一員となる予定のハイジが、彼を旅行に連れ出し、彼が正気を取り戻すよう働きかけるよう頼む。しかしハイジはその願いを断り、カールは失望する。

ハイジと入れ違いにペランが来訪。『新スイス・ポスト』新聞の朝刊に、ナスト社内での不和が報じられていることを告げる。カールの驚愕。カールは、ペランが株価の下落作戦をやり過ぎたことを咎める。ペランは、同社の株価がますます下がり、このままだと取り返しのつかない損失が生じることを危惧する。それゆえ『新スイス・ポスト』新聞の夕刊に、朝刊の報道をきっぱり否定する記事を掲載すべきであると主張する。さらにカールのゲオルクに対する態度が軟弱であることに業を煮やし、弁護士と相談し、民法の中に「精神疾患を病み、他人の助けを必要とし、本人や家族を財政的な危険に曝す人は、後見人の管理下に置かれねばならない」という内容の規定を見つけたことを語る。ペランによれば、ゲオルクの行為能力は損なわれており、精神病の規定は拡大解釈できるという。

アンナとゲオルクがその場に加わる。カールとペランは改めて、ナスト社を取り巻く状況が深刻であると語り、ゲオルクが独立して自らの理念のために生きられるようにすべきこと、日本への爆撃機の納入で得た金を払うので、彼が経営から退くべきことを勧告する。これに対してゲオルクは、ペランによる株価を下落させる作戦を明らかにすると脅す。ゲオルクは、母と妹が近しい人（アンナの場

合はゲオルク、グリットの場合はボルン）の将来を心配し、穏健な解決を模索するのを前にして、彼女らが世界の不公正への義憤からではなくゲオルクへ味方したことをなじる。そして、たとえ母と妹が反対しても、彼が尽力することは彼の幸せや人生よりも重要であること、労働者を味方につけて抵抗する思いつきを語る。議論は紛糾し、ペランはついにゲオルクに禁治産宣告を下す考え、ゲオルクの祖母が精神病で亡くなったという調査結果を口にする。ゲオルクは、それを天才的な思いつきであると評する。ペランは、ゲオルクの言行が狂っており、普通ではないと弾劾すると、ゲオルクは逆に普通の人ペランこそ犯罪者の共犯であることを指摘する。アンナは、諸関係や体系は我々の善意よりも強いとゲオルクを諭す。ペランはゲオルクの法外な傲慢さをなじり、彼が理性を持つように迫る。

最終幕である第5幕の舞台は、第3幕と同様ヴェヒター家の別荘におけるゲオルクの個人事務所である。第5幕は2場からなる。

第1場においては、ゲオルクが聖書のような本の読書に耽っていると、アンナが彼を慰めにくる。彼女は、彼女とグリットが彼を心配するあまりカールとペランの側へ意見を変えたことを語り、カールとペランは禁治産宣告の件で覚悟ができているので、これ以上、彼らに戦いを挑まないようゲオルクを諌める。ゲオルクは彼女らが意見を変えたことを批判し、次のように主張する。

> 私たちの国（スイス）は小さい。スイスに人倫的、精神的な力以外の力はなく、正義以上に強い武器はありません。またもや私がほとんどやや大げさに話すことを許してください。ご覧ください。私たちの山から大きな川がヨーロッパ中へ流れます。川の源泉に住む私たちは、この源泉を清潔に保つ委託を受けています。思考の純粋さと行為の清潔さを、私たちは自らに要求しなければなりません。どんなにしばしば私たちは、この要求が満たせなかったことでしょう。どんなにしばしば私たちは、弱さ、単なる安楽、利益追求心から、不法が私たちに目下、強く見えたという理由で、不法に屈したことでしょう。私たちがこうした道をさらに先へ進むことは許されません。今日、全世界で荒れ狂っている法と暴力の間の恐るべき戦い、むき出しの卑しい暴力が法と人倫のあらゆる絆を破壊しかねない戦いにおいて、私たちは常に確固不動として正義の側に立って戦うべきなのです。(S.74)

「私たちの山」アルプスのゴットハルトが源流となり、ドナウ川がドイツ語圏へ、ローヌ川がフランス語圏へ、ポー川がイタリア語圏へ流れ出る。1930年代の「精神的国土防衛」においてはこのゴットハルトを象徴として、ヨーロッパの三大言語圏の中心としてのスイスが讃えられた[16]。スイスはその際、川が四方へ流れ出る[17]エデンの園に譬えられることもあった[18]。「思考の純粋さと行為の清潔

---

[16] Kuhn, Thomas K. : Reformator - Prophet - Patriot. Huldrych Zwingli und die nationale Besinnung der Schweiz bei Leonhard Ragaz, in : Die Zürcher Reformation : Ausstrahlungen und Rückwirkungen, hrsg. im Auftrag des Zwinglivereins v. Alfred Schindler u. Hans Stickelberger, Bern 2001, S.481.

[17] 創世記2－10。

さ」という要求を「弱さ、単なる安楽、利益追求心」から満たせなかった、という箇所は、武器輸出の前身ともいえる、スイスにおける中世末期以来の傭兵供出の伝統のことを指しているのであろうか。

他方アンナは、世界は不完全で、簡単に善悪には分けられないこと、東アジアでは正義ではなく力をめぐる戦いが行われており、日本のみならずイギリス、アメリカ、ロシアも権力政治的な関心から中国情勢に介入しているのではないか、と問いかける。こうした台詞の中には、中立国スイスの特徴ともいえる、国際情勢に関する冷静な見方が表れている。

ゲオルクは、ペランにとって全ては明晰な計算のためにあることを指摘し、彼による、全てを数に還元する思考の恐ろしさについて語る。アンナは、人間は現実には数に左右され、決断の自由は非常に制限され、大抵の場合より大きな悪とより小さな悪の間を選べるに過ぎないという。

ハイジが現れ、アンナがその場を去る。ゲオルクはハイジに、会議の席でアンナとグリットがナストとペランの側へ意見を変えたこと、禁治産宣告の脅しを受けたことを伝える。ハイジはゲオルクを励まし、日本へ爆撃機を輸出しないため労働者へ働かないよう呼びかけること等を勧める。しかしゲオルクは、そうした抵抗の効果に懐疑的になっており、多くの財産とそれを求める欲望こそ人間を戦いと暴力へと駆り立て、深い不正へと巻き込むのではないかと自問する。

エルプが登場し、共産主義者の集まる飲み屋で労働者の意見を聞いたという。彼らの代表によれば、資本主義の全体系が病んでおり、個々人の活動には大した価値がないので、ゲオルクの市民的な理想主義はプロレタリアートの役に立たない。他方ゲオルクは、彼ら労働者が共産党の綱領に囚われていることに失望する。エルプ退場。ゲオルクは、爆撃機の引き渡しを阻むため労働者と共に闘いを挑む覚悟を固めつつあるが、その危険つまり労働者が彼の目的を理解しないことも予感している。ゲオルクは労働者と資本家の対立を前にして、どちらかの陣営に立たざるを得ないことから、自由がないことを嘆く。ハイジはこれを聞き、あらゆる強制を振り解き、上へ高く昇ることを勧めると、ゲオルクは一種の啓示を受けたかのように、すぐさま飛行機に乗る手配をする。彼は夕陽の最後の残光の中で空から下界を眺め、自由を味わい、気持ちの整理をつけようと思ったのだった。

第２場において、ゲオルクとコンサートへ行く約束をしたアンナとグリットは、彼が約束した場所と時間に現れないので、夜の８時頃ゲオルクの個人事務所へ彼を探しにくる。ゲオルクがいないので、グリットはカールへ電話し、彼の所にもゲオルクがいないことを確かめる。アンナとグリットが意見を変えたことで財産の損失が防げ、上機嫌のボルンが来訪。グリットとボルンが先にコンサートホールへ向かうのと入れ違いにハイジ、次いでカールとペランが来る。３人がハイジにゲオルクの消息を尋ねると、彼女は彼が１時頃、飛行場へ向かったという。飛行場へ電話で問い合わせると、ゲオルクの乗った飛行機はまだ帰って来ていないことがわかる。ハイジは、ゲオルクが上空から突然、下界の紛れもない卑しさを目にし、全てのことにうんざりしたのではないか、と取り乱す。果たして電

---

[18] Kuhn, T. K. : a.a.O., S.477.

話がかかってきて、夕方5時頃ゲオルクの乗った飛行機が墜落し、ゴットハルトの部隊が彼の遺体を収容したという連絡が入る。ペランが「誰もこうした展開を先んじて予見できませんでした。心から、心からお悔やみを述べさせていただきます」（S.91）と語ると、アンナは形容しがたい目つきをして、「ええ、私はあなたが最初に考えたことを知っていますー株価が上がると」（Ebd.）といい、ペランを睨む。

Ⅲ．受容

1938年1月に行われた『日本への爆撃機』のビールでの初演は大成功を収め、当地で計18回の上演が行われた[19]。1938年の間に同作はバーゼル、ベルン、ゾロトゥルン、オルテン等スイスの他の町の劇場においても上演された（ベルンでは同年の4～5月と10月、2期にわたって上演）。『日本への爆撃機』に関する新聞の劇評は一般に控え目ではあったが好意的で、ただし作品の結末に対しては幾つかの批判が加えられた[20]。左派のメディアによる劇評は、おそらく同作が労働者に対する批判を含んだことが原因で、良いとはいえなかった[21]。『日本への爆撃機』はスイスの普通の観衆を啓蒙し、左派の観衆を挑発したのであろう。こうしてスイス各地の劇場での上演が一般に好評を博したこともあり、『日本への爆撃機』は1939年2月、チューリヒのプファウエン劇場（後のシャウシュピールハウス）においても5回、後に映画監督として有名になったレオポルト・リントベルク（Leopold Lindtberg）の演出の下に上演された。このプファウエン劇場が後世、1930年代から第二次世界大戦中にかけてのスイスを代表する劇場と見なされたことは、周知のとおりである。

このシャウシュピールハウスでの『日本への爆撃機』の上演について、説明を加えておきたい。フェルディナント・リーザー（Ferdinand Rieser）は1926年、私設のプファウエン劇場支配人となり、1933年ナチスがドイツで政権を掌握した後、同国を追われた（特にユダヤ系の）優れた俳優を多く受け入れた。そして左翼的な色彩の濃い時事劇を上演した結果、同劇場をヨーロッパにおける有数のレベルへと高めていた。しかしスイスにおいて、このリーザーの下のプファウエン劇場に対しては批判も存在した。なぜなら外国人の俳優を多く起用し、スイスには元々ないとされた反ユダヤ主義等の問題を扱う作品を上演したからである。これは、スイスにおいて公認された「精神的国土防衛」の文化政策に反するとされた[22]。リーザーは1938年、経営上の理由でプファウエン劇場の売却を決断し支

19　以下『日本への爆撃機』の受容に関する記述は、主にAnhang, a.a.O., S.472-476による。

20　s. a.a.O., S.473.「『日本への爆撃機』は人間の純化や改善に役立たない」（"Bomber für Japan", in : Neue Berner Zeitung 7.10.1938）、「ゲオルクが自らの階級の思考世界に捉えられ、具体的な行為に至らないのは遺憾」（"Bomber für Japan", in : Volksrecht Zürich, 28.1.1938）、「ゲオルクの死は英雄的ではなく、弱さに由来する。それは、より深い悲劇的な震憾ではなく、同情を呼び覚ますに過ぎない」（"Bomber für Japan", in : Basler Nachrichten 25.3.1938）「ゲオルクのやり方はうまくゆかなかったので、私たちは即刻より良い道を探そう」（"Bomber für Japan", in : Die Weltwoche, 17.2.1939）等。

21　Anhang, a.a.O., S.474.

22　Amrein, Ursula : Kulturpolitik und Geistige Landesverteidigung - das Zürcher Schauspielhaus, in : Fünfzig Jahre danach. Zur Nachgeschichte des Nationalsozialismus, hrsg.v. Sigrid Weigel u. Birgit Erdle, Zürich 1996, S.286-300.

配人の座を退いた。そしてすでに触れたオプレヒト出版社の社長エーミール・オプレヒト（Emil Oprecht）が同劇場を母体に新たに「新チューリヒ劇場株式会社」を設立した。この新しいプファウエン劇場の支配人に就任したのがオスカー・ヴェルターリン（Oskar Wälterlin）である。彼は、リーザーの時代に強かった、ナチス・ドイツを逃れた亡命者への関心と、スイスの文化政策との媒介に努めた。その結果、「精神的国土防衛という言葉は制限ではなく、広さを意味すべき」[23]こと等が謳われた。「反ファシズムと精神的国土防衛は、（ヴェルターリンの下での）シャウシュピールハウスの文化政策的なディスクルスにおいては、交換可能な概念であった」[24]。したがって反ファシズムと精神的国土防衛の両立という同様の関心を追求した『日本への爆撃機』がヴェルターリンの下のプファウエン劇場において演目として取り上げられたのは、不思議ではなかったといえよう（「精神的国土防衛」は公認された文化政策において主として左の全体主義[25]、リーザー、ヴェルターリン下のプファウエン劇場において右の全体主義との対立が強調された）。

1958年『日本への爆撃機』はテレビドラマ化され、1987年、1993年にもテレビ放映された[26]。劇作品としての『日本への爆撃機』は1987年、ルツェルン市立劇場において再演された。しかし演出の陳腐さ等が劇評で批判され、評判は芳しくなかったようである[27]。

『日本への爆撃機』が初演後、スイスにおいて半世紀以上の長きにわたって、断続的ではあるが上演・放映された理由として、以下の点が考えられる。スイスは第二次世界大戦中から今日に至るまで世界有数の武器輸出国であり（スイスの人口一人当たりの武器輸出額は、2008年度、世界第2位[28]）、同作において掲げられた問題提起はスイス人にとってアクチュアルであり続けている。例えばスイスの航空機メーカー「ピラトゥス」は軍用練習機を東南アジア、中米、中東の国へ輸出した。この練習機が輸出先国で実戦向けへ改造され、市民を攻撃するために用いられることが、一部のスイス人によって批判されたのである。

Ⅳ．作品の分析

Ⅰ～Ⅲの論述を踏まえて以下『日本への爆撃機』を分析し、同作に表れたスイスの「精神的国土防衛」の内容、同作の特徴、意義について考察を行う。

（1）ゲオルクと、ペランおよびカールとの対立関係

『日本への爆撃機』は場面の転換にやや乏しく、第1幕で提示されたゲオルクと、ペランおよび

---

23 Wälterlin, Oskar : Zum neuen Beginn. Anlässlich der Übernahme der Direktion des Zürcher Schauspielhauses (1938), in : Bekenntnis zum Theater. Reden und Aufsätze. Illustrationen von Teo Otto, hrsg.v. der Neuen Schauspiel AG zum 60. Geburtstag von Oskar Wälterlin, Zürich 1955, S.64 f..

24 Amrein, U. : a.a.O., S.308.

25 Kreis, Georg (Hrsg.) : Staatsschutz in der Schweiz : die Entwicklung 1935-1990 ; eine multidisziplinäre Untersuchung, Bern/Stuttgart/Wien 1993, S.254.

26 Anhang, a.a.O., S.475.

27 Stefani, Guido : Papierene Moral in Schwarzweisstönen, in : Luzerner Neueste Nachrichten, 21. 11. 1987.

28 http : //www.kriegsmaterial.ch/site/2009/04/28/Schweiz-im-Jahr-2008-zweitgroesster-Pro-Kopf-Waffenexporteur.html

カールとの対立関係が、劇が進行する中で深まる構成を取っている。それゆえ同作の全体を振り返って明らかになる、両者の対立関係を、分析の助けとして本章の最初にまとめておく。

ゲオルクはスイス軍の将校（中尉 S.13）であり、スイスの国土防衛に深い関心を持っている。彼が日本への爆撃機の輸出に反対する理由は2つあり、第一にはそれが日本軍によって非戦闘員の攻撃のために用いられるというキリスト教的・人道的な理由（S.18）、第二には日本を支援することが広い観点からスイスにとって不利になるというスイスの国土防衛上の理由（S.14, 74）である。他方ペランとカールは、スイスの国土防衛に関心を持っていない。キリスト教や人道に対する関心も薄く[29]、カールは世界が武器を必要としていることを遺憾としつつも（S.17）、武器輸出へ反対するわけではない。

ゲオルクは一種の理想主義、「人間性」（S.23）や「良心」（S.18）を重視し、国際的に広い視野を持とうと努める（S.14）。そして既成の形式・体系・現実を作り替えることができる個々人の「精神 Geist」に依拠する（S.55, 74）。これに対してペランとカールは物質主義的な関心が強く会社の経済的な繁栄を第一に考え（S.12）、ゲオルクによれば近視眼的（S.14）である。そして既成の形式・体系・現実への適合や利害打算に役立つ、道具的な意味での「理性 Vernunft」[30]、「悟性」（S.58）に依拠する（ペランは自らの「理性」あるいは「悟性」を、株価を意図的に下落させるという目的のために用いることすら辞さない）。ゲオルクがスイスの国家や個々人のあり方に関心を持ち、「国家公民 citoyen」としての政治的な市民を体現するのに対して、ペランとカールは「ブルジョワ bourgeois」としての経済的な市民を体現している。

（2）個人の精神的なモラルへの期待－国家と市民社会

ペランは、「私たちはお金を払う人に製品を引き渡す。それでおしまいです」（S.12）と語る。これに対してゲオルクは、「たとえ私たちの会社が経済的な損失を蒙る危険を冒しても」（S.11）、非人道的な「この（日本との）契約を結び、日本という国へ航空機を納入することを拒否」（Ebd.）する。その際、彼は、日本への爆撃機の輸出を阻むことが困難であるにもかかわらず、「各人は少なくとも自らの持ち場で正しいことを行うように努めるべき」（S.18）ことを説く。なぜなら「総じて秩序というものは、人間の中の精神が善または悪へ向けて働くかによって、良かったり悪かったり」（S.55）し、「私たちの世界がその全文明と共に底なしの深淵へ沈むか否かは、私たち一人一人にかかっているからである」（S.18）。こうしてゲオルクは、個人の精神的なモラルに期待する[31]。ゲオルクが、グリットおよびアンナが自らの確信に基づいて決断を下さず、彼女らがそれぞれボルンあるいはゲオルクへの同情がゆえに後で立場を変えたことを厳しく咎める（S.39, 67, 74）のも、彼女らの個人としての精神的なモラルが不確かであるからに他ならない。

29　聖書やキリスト教に関する語彙は、ゲオルクを皮肉る時にしか使われない（s. S.15, 21 f..）。

30　ペランは第一幕で行われる会議の前に、「理性」つまり自分の立場が勝つだろう、という（S.6）。その他の箇所で、Vernunft は「正気」あるいは「分別」といった、日常語的な意味で用いられている（S.58, 62, 64, 69）。

31　彼の批判は、ペランやカールのみならず共産主義者に対しても向けられている（S.81）。彼らは、この2人と同様、しかし「体系の強制」という別の理由から、個人の精神的なモラルを評価しない。

ところでゲオルクが日本への爆撃機の輸出を阻もうとする際、個人の精神的なモラルへ期待することは、スイス社会の特徴と何か関係があるのであろうか。歴史的な事実として、スイスでは1874年の連邦憲法で営業の自由が定められ、経済面において基本的に政府部門が小さく、政府による市場への介入が弱かった。特に「武器弾薬の製造・販売に対する国家による統制が欠けていた」[32]。経済市民（ブルジョワ）の自由が、国家市民としての義務よりも、しばしば重視されてきた。これに対しては1938年2月に、連邦憲法41条を改正し、民間企業による武器弾薬の製造・購入・販売を全面的に禁じて、連邦政府にのみ国防目的で認めるよう求めた国民イニシアティブ案が提出された。しかし政府による、全面統制の効果を弱めた対抗法案が提出され、国民投票の結果、政府案の方が採択されたのである[33]。この国民イニシアティブ案の結果に表れたように、国家の側から民間企業による武器弾薬の製造・購入・販売を統制することに対して、スイスにおいては反対が強かった。こうした背景からゲオルクは、民間企業による武器弾薬の製造・購入・販売の統制を、国家ではなく個人の精神的なモラルの側から期待したと思われる。いみじくも「精神的国土防衛」において精神的な価値を守ることは、国家ではなく主に市民の課題であると宣言されたのである[34]。

（3）ゲオルクの思想・宗教的な背景－キリスト教

ゲオルクが構想する「精神的国土防衛」の重要な側面は、正義（S.74）が国際的に貫徹することである。こうした「万人が生まれながらにして持つ正義の感情」（S.18）つまり自然法とキリスト教との関わりが、作中では示唆される（Ebd.）。さらに第5幕の冒頭においてゲオルクは、聖書のような書物の読書に没頭しており、自らの生き様、特に日本への爆撃機の輸出に対する態度を振り返る。そして福音書に登場する「金持ちの青年」[35]（S.79）の話を引き、彼が使徒のような強い信仰を持たないことをハイジに対して嘆く（S.80）。

上で挙げた2つの例からも、ゲオルクが依拠する個人の精神的なモラルは、その支えの一つをキリスト教の中に持つことが考えられる。また『日本への爆撃機』おいては全編にわたって、聖書やキリスト教に関する様々な比喩、当てこすりが散りばめられている[36]。それゆえ以下、聖書やキリスト教

---

32 独立専門家委員会　スイス＝第二次大戦『中立国スイスとナチズム　第二次大戦と歴史認識』（黒澤隆文編訳、京都大学学術出版会、2010年）p.190.

33 同上、p.191.

34 Zanoli, Marco : Zwischen Klassenkampf, Pazifismus und Geistiger Landesverteidigung. Die Sozialdemokratische Partei der Schweiz und die Wehrfrage 1920-1939, in : Zürcher Beiträge zur Sicherheitspolitik und Konfliktforschung, Nr. 69, 2003, S.230.（http : //e-collection.library.ethz.ch/eserv/eth : 26918/eth-26918-01.pdf）

35 金持ちの青年がイエスに永遠の救いに入る道を尋ねると、イエスは全財産を寄付すべきことを勧め、それができない若者は失望してイエスの下を去っていった（マタイ 19－16～22）。

36 ゲオルクは「私は弟（アベル）の番人でしょうか」（創世記4－9、新共同訳、聖書からの引用は以下同様）と語り日本への爆撃機の輸出をカインの弟（つまり中国）殺しに譬え（S.12）、ペランは、ゲオルクが最後の審判のラッパを吹いていると揶揄する（S.17）。アンナは、ルターがヴォルムス国会へ召還された時に語ったのと同じ台詞「私にはこれしかできません」によってゲオルクの意見を支持し（S.21）、ペランは日本への爆撃機の輸出取り止めの決定を株主に説明できるか危惧し、次回の委員会は教会で開こうと提案する（S.21）。グリットはゲオルクを、彼はヨーロッパの道徳教皇ではない、としてたしなめる（S.37）等。

のモチーフが『日本への爆撃機』という作品全体の展開に対して果たす役割を、特に「精神的国土防衛」との関わりから検討してみたい。

検討の手がかりとして、第4幕の後半においてゲオルクが誰に対してともなく語る、「（日本による爆撃機の発注という）委託が提供されなければ、破滅することもないだろう」（S.65）という台詞に注目してみたい。この台詞の前後で、ペランはゲオルクの胸中を推測し、「私（ゲオルク）は（日本への爆撃機の輸出に反対したことにより）自分の魂を救った Salvavi animam meam[37]」（Ebd.）と語り、「あなた（ゲオルク）は、自分の魂を救うために高い代償を要求していることに気付かないのですか。他人がこの代償を払わねばならず、全ては見渡し難い」（Ebd.）とゲオルクのことを批判する。これら3つの箇所から、日本への爆撃機の輸出を拒否することがゲオルクの魂の救いを意味し、それとは逆に日本への爆撃機の輸出が、救いの対極としての破滅ないしは罪を招くことが暗示されている。するとゲオルクにとって日本への爆撃機の輸出は、福音書における悪魔の誘惑（マタイ4、ルカ4－1～13）に比すべきものであったとはいえないだろうか。福音書における主の祈りには、「私たちを誘惑に遭わせず、悪[38]から救ってください」（マタイ6－13）とある。

この仮定に基づいて、『日本への爆撃機』の筋の展開を、キリスト教的な視座から解釈してみたい。第1幕においては、日本への爆撃機の輸出に反対するゲオルクの立場が、日本への爆撃機の輸出に賛成し、彼によれば悪魔の側に立ったペランおよびカールの立場に対して、いったん勝利を収める。しかし第2幕以降、ペランは悪魔の誘惑に屈し自ら悪魔的となった存在に相応しく、ナスト社の株価を人為的に引き下げ危機感を煽り、株価下落の原因が日本への爆撃機の受注を断った点にあるとナスト社の関係者に思い込ませようとする。福音書において悪魔は3つの問いを立て、イエスを沙漠で誘惑した[39]。『日本への爆撃機』においてこの3つの問いに譬えられるのが、金に窮したボルンが恋人のグリットに立てる「隣人とは誰か（中国人あるいはボルンか）？」（S.33）、グリットがゲオルクに立てる「責任はどこまで及ぶのか（中国人あるいはボルンまでか）？」（S.39）、ペランとゲオルクとの間で意見が対立する「現実とは何か（中国人の窮状あるいはナスト社の危機か）？」（S.14, 17, 33, 66, 72）という問いである。イエスは悪魔の誘惑を退けたが、グリットはボルンに説き伏せられ、アンナもゲオルクに与したかつての意見を変える（アンナが最初の意見を変えたことは、カールによって「回心させる bekehren」というキリスト教的な表現によって形容されている［S.67］）。彼女らとは対照的に、ハイジとゲオルクは誘惑に克つ（S.58f., 66, 71）。しかし現実においてはゲオルクの墜死により、ペランおよびカールの立場が勝利を収めたように見える。

ところで本章の（1）において、ゲオルクが「精神」、ペランが「理性」を重視したことに触れた。「精神 Geist」というドイツ語は聖霊とも訳され、キリスト教においてきわめて重視されている。

---

[37] このラテン語訳聖書ヴルガータ（エゼキエル3－19）からの言葉は、「自分は警告を発し、いうべきことはいい尽くした。後の責任は負わない」という意味でしばしば用いられる。

[38] ここは新共同訳では「悪い者」だが、ルター訳のドイツ語聖書に則って「悪」としておく。

[39] マタイ4において悪魔はイエスに対し、石がパンになるように命じ、神殿の屋根から飛び降り、世の全ての国々を与える代わりに悪魔を拝むよう、誘惑する。

他方、聖書自体[40]あるいはキリスト教の歴史[41]から、理性に対する批判をしばしば読み取ることができる。こうした点からもゲオルクによるペラン、カールに対する批判がキリスト教的な立場から行われていることを改めて確認することができよう。

聖書においては、悪魔の誘惑に関する様々な側面が取り上げられている。つまり悪魔の誘惑は退けるべきであるが、それに負けてしまうのが人間の現実でもある。それゆえ『日本への爆撃機』は、日本への爆撃機の輸出への反対（ゲオルク）および賛成（ペラン、カール、アンナ、グリット）という対極的な立場を描くことを通して、キリスト教的な立場から見た（悪魔の）誘惑一般に対する人間の2つの対応を描いている、と解釈することは可能であろう。実際『日本への爆撃機』の上演後、同作の中に「信仰と不信仰の間の世界史的で終末論的な闘いという問題性」を読み取る劇評も現れた[42]。

（4）ゲオルクによる社会民主主義への共感－労働者と市民

ペランとカールは、日本への爆撃機の輸出を正当化する理由として、それがナスト社の労働者の雇用を保証する、という点を挙げていた（S.16）。ここからゲオルク、ペラン、カールという市民と、ナスト社の労働者プファイファー、エルプとの関わりが、第3幕以降のテーマとして取り上げられる。プファイファーとエルプは、社会民主主義者かつ労働組合員である（S.49）。以下、作中で提示される、労働者と市民との関わりをめぐる2つの結合のタイプを整理してみたい。

ペラン、カールとプファイファーとの結合が代表するタイプは、雇用の確保および会社の経済的な繁栄を重視し、日本への爆撃機の輸出に賛成する。このタイプは、日本の爆撃機の空襲によって殺される中国人の運命について関知しようとしない。これをよく表すのは、プファイファーによる「他人のことより我が身の利益が大事ですよ」（S.52）という台詞である。彼は社会民主主義者ではあるが、その信条は彼の思考や行為に反映していない。これは、ブルジョワ（経済市民）と労働者との結合として性格付けることができよう。他方ゲオルクとエルプとの結合が代表するタイプは、日本への爆撃機の輸出に反対し、中国人との連帯を図る。ゲオルクが叫ぶ「労働者が賃金闘争や労働時間の短縮をめぐってではなく、（キリスト教や人道という）理念をめぐってストライキをするのであれば、素晴らしいことだ」（S.53）という台詞は、この第二のタイプを母体とした発言である。これは「国家公民 citoyen」と労働者との結合ということができよう。そしてこの個人の精神的なモラルを前提とした第二のタイプこそ、「精神的国土防衛」の担い手として構想されたことが考えられる。

社会民主主義党が中軸となったスイスの労働者階級は、第一次世界大戦中の連邦内閣の失政を理由に1918年ゼネストを行った。しかし軍隊の投入により鎮圧された。1920年代から30年代にかけては、彼らに脅威を覚える市民階級が結成した「ブルジョワ・ブロック」との対立が続いた。しかし社会民主主義党は1935年の党大会を転機に従来の階級闘争、反軍隊路線を変更し、「精神的国土防衛」

---

40 ルター訳聖書における Vernunft は新共同訳で「思惑」（コリント2　10−6）、（肉と同列に置かれた）「心」（エフェソ2　2−3）と訳され、否定的な意味で用いられている場合がある。

41 ルター『奴隷的意志』（山内宣訳、世界の名著『ルター』、中央公論社、1966年）pp.236-237等。

42 “Bomber für Japan”. Neu einstudiert im Stadttheater, in : Der Bund, 6.10.1938.

に参加する決定を下した。ただし同党の左派はこの決定に反対し、同党を離脱した。『日本への爆撃機』が成立する半年ほど前の1937年7月、スイスの鉄鋼・時計産業における労働組合と雇用者団体の間で平和条約（いわゆる「労働協約」（Arbeitsfrieden）が締結された。この「労働協約」は、雇用者が労働者の待遇改善に努める代わりに労働者はストライキなど実力行使などの手段に訴えないこと等を取り決めた。この労働者と市民（資本家）の歩み寄りを示す「労働協約」は、後にスイスの鉄鋼・時計産業以外の他の産業部門の労働者と資本家の間においても締結された。そしてスイス市民階級の内憂をある意味で解決し、第二次世界大戦中スイスの国内情勢の安定に寄与した一因として挙げられる[43]ことが多い。したがって「労働協約の意義を無批判に理想化する」[44]傾向が支配的であった。

『日本への爆撃機』においては、カールおよびペランが労働者のストライキに反対し、「労働協約」の遵守を要求する側に属することが示される（S.68）。それゆえ彼らと労働者プファイファーとの結合が、「労働協約」に基づく労働者と市民（資本家）との結合を代表していると言える。しかるにゲオルクは、こうした「労働協約」に基づく労働者と市民（資本家）との結合の影の面を批判している。なぜならこの結合のタイプは、日本への爆撃機の輸出に賛成していたからである。ゲオルク自身は社会民主主義者ではないにもかかわらず、彼は労働者のプファイファーとエルプに対して、日本への爆撃機の輸出へ反対することが、彼らの社会民主主義者としての人道的な信条、つまり「世界において不正や強者による暴力支配の代わりに、正義と公正がますます多く支配すること」（S.49）を望む点において合致することを説得しようとする。そしてエルプ周辺の労働者を、日本への爆撃機の輸出へ反対する積極的な行動へ駆り立てる思いつきを語る。しかしここでゲオルクは、国家市民としてのジレンマに直面せざるを得ない。つまりスイスにおいて武器輸出は合法的な行為であり、日本への爆撃機の輸出を止めさせるためには、ストライキやサボタージュといった、「労働協約」によれば違法とされた行為に賭けざるを得ないのである（S.70）。

以上の（3）、（4）から『日本への爆撃機』において、キリスト教がゲオルクの言行に大きな影響を及ぼし、彼が社会民主主義の本来の姿に理解を示していることが明らかになった。

（5）最終場面の解釈

最終幕の第5幕においてゲオルクは、彼に禁治産宣告を下すというペランの恫喝を前にして、一方で彼に使徒のような強い信仰がないことを嘆き（S.80）、他方でエルプのような、社会民主主義を正しく理解する啓蒙された労働者との連帯を考えている（S.81）。しかし彼は、ストライキやサボタージュのような抵抗を労働者と共に行うことで、災厄に満ち、錯綜した世界がどう変わるのかと問い（S.70, 80）、世界を「嘆きの谷」と見なすキリスト教的な諦念に陥る。『日本への爆撃機』は、飛行機に乗ったゲオルクがアルプス上空で墜死を遂げるという悲劇の裡に終わる。

フォン・ヴィーゼによれば、グッゲンハイムは『日本への爆撃機』が悲劇たることを望み、同作が

---

43 Heiniger, Markus : Dreizehn Gründe. Warum die Schweiz im Zweiten Weltkrieg nicht erobert wurde, Zürich 1989, S.198.

44 Jost, Hans Ulrich : Identität und nationale Geschichte, in : Widerspruch. Beiträge zur sozialistischen Politik, 1987, Heft 13, S.12.

ゲオルクの死によって終わることは自明であったという[45]。以下その理由を推測してみたい。ゲオルクは自らの人道的・キリスト教的な信条を裏切ってまで、日本への爆撃機の輸出に賛成するわけにはゆかない。それはゲオルクの魂を救わないことにもなる。しかしだからといって、社会民主主義を正しく理解する労働者と連帯し、ストライキやサボタージュ等の実力行使に踏み切れば、「労働協約」によれば違法とされた行為に賭けざるを得ない。その結果スイス社会の秩序を乱し、市民階級の内憂を新たに掻き立て、ドイツやイタリアなど枢軸国がスイスへ介入する口実[46]を与え、外患を増やし、「国土防衛」という彼の目的を裏切ることにもなりかねない。したがって残された選択肢は、ゲオルクが自ら死を選ぶことしかなかったのであろう。劇中で彼の死の理由や原因は明らかにされず、飛行機による墜死という事実だけが告げられる。ゲオルクの遺体は、「精神的国土防衛」において神聖化されたゴットハルトの懐に抱かれ、彼の死はいわば国民的に聖化されるのである。

結語

以上、著者グッゲンハイムの略歴、『日本への爆撃機』のあらすじ、受容をまとめ、作品の分析を行った。

『日本への爆撃機』における「精神的国土防衛」とは、スイスの外に対しては非人道的な枢軸国への武器輸出の禁止、スイスの中に対してはそれを可能にする、個人の精神的なモラルの重視、労働者と国家市民との結合の模索であったといえよう。「精神的国土防衛」の多くのタイプが、得てして無批判なスイスの賛美あるいは過度に外国の敵対像を煽ることへ陥りがちであった[47]のに対して、『日本への爆撃機』における「精神的国土防衛」は人道的・キリスト教的な正義・公正といった普遍的な理念の追求および非人道的な国へスイスが武器を輸出することによりこうした理念を実現できなくなることへの懸念を描いている。

他方で同作における「精神的国土防衛」は、スイスの国土防衛への寄与という点において、矛盾を孕んでいたといえよう。ゲオルクは日本への爆撃機の輸出へ反対する理由として、キリスト教的・人道的な理由（S. 18）、スイスの国土防衛上の理由（S. 14, 74）という2つの点を挙げていた。この2つの理由はゲオルクによって当初、両立するかのように無関連に述べられる。しかし作品が展開するにつれて、第一の普遍的な正義・公正といったキリスト教的・人道的な理念を、社会民主主義の助けを借りて現実化を図ると、第二のスイスの国土防衛という目的と抵触する可能性が暗示された。もっともグッゲンハイムはこうした矛盾を観衆にはっきりと示すことなく、ゲオルクの墜死という幕切れ

---

45 Gespräch mit Ursula von Wiese, a.a.O., S.7.

46 民族主義を標榜するイタリアはイタリア系住民の住む国外の地の併合を図っており（イレデンティズモ［未回収地回復運動］）、スイスのロマンス語圏はこの運動の標的となっていた。他方スイス国内においては、ナチス・ドイツに同調する国民戦線の動きがあった。

47 （固有のものと外来のものとの錯綜を見ることなく）「スイス固有のものは良い、外国から来たものは悪い」という単純な対立図式、「価値ある（スイス）固有のもののための戦いは、価値のない外国のものを防ぐための最善の戦いである」といった「精神的国土防衛」観も存在した（s. Amrein, U. : a.a.O., S. 294 f..）。

によって、いわば封印した。後にハンス・ルドルフ・ヒルティ（Hans Rudolf Hilty）が、『日本への爆撃機』を「第二次世界大戦前のスイス人によって書かれた、最も「brisant」（論議を呼び、危険）な作品の一つ」[48]と評した所以である。いずれにせよ『日本への爆撃機』においては、第二次世界大戦の勃発を予感しつつ、作者が理解した「精神的国土防衛」をいかに貫くかという問題、スイスのナチス・ドイツに対する「抵抗と協調」をめぐる葛藤が、間接的にではあるが一つの大きなテーマとなっている。

本論は『日本への爆撃機』を、スイスの「精神的国土防衛」との関わりという観点から考察してきた。しかし同作はこうしたローカルな関心を離れても、グローバルな交易が国際的に行われる時代における経済倫理を問い、道徳的な反省や人命よりも労働者の雇用や企業の利益が重視されることを問う作品として、未だに現代性を失っていないといえよう。

---

[48] Hilty, Hans Rudolf : Schweizer Waffenhandel, dramatisch, in : Tages-Anzeiger, 4. 12. 1987.

【Abstract】

Die "Geistige Landesverteidigung" der Schweiz in Werner Johannes Guggenheims "Bomber für Japan"

Takehito SODA*

Die vorliegende Abhandlung unternimmt den Versuch, das Bild der "Geistigen Landesverteidigung" der Schweiz in Werner Johannes Guggenheims (1895-1946) Zeitstück "Bomber für Japan" (1937) zu verdeutlichen. Es werden Guggenheims Lebenslauf vorgestellt (I), die Handlung des Werkes (II) sowie seine Rezeption (III) zusammengefasst und sein Inhalt analysiert (IV). Die Untersuchung ergab, dass Guggenheim unter der "Geistigen Landesverteidigung" in seinem Werk das Verbot des Waffenexportes in die inhumanen Achsenmächte, die Betonung der individuellen Moral als Grundlage und die Suche nach einer idealen Verbindung zwischen der Arbeiterklasse und den Staatsbürgern (citoyen) verstand.
Keywords : Switzerland, drama, Spiritual defence, Arms Exports, Anti-fascism

本論は、スイスの劇作家ヴェルナー・ヨハネス・グッゲンハイム（Werner Johannes Guggenheim 1895-1946 年）の時事劇『日本への爆撃機』（Bomber für Japan 1937 年）に現れた、「精神的国土防衛」の姿を明らかにすることを目的とする。「精神的国土防衛」とは、周囲をドイツ、イタリア等の大国に囲まれたスイスにおいて 1930 年代以降、唱えられた、「スイスの特性を強調し、全体主義的な独裁政権に対して自らを守る姿勢」の総称で、これには多くの変種が存在した。本論においてはグッゲンハイムの略歴、作品のあらすじ、受容を紹介し、作品の分析を行った。検討の結果、『日本への爆撃機』において「精神的国土防衛」とは、非人道的な枢軸国への武器輸出の禁止、個人のモラルの強調、労働者と「国家市民 citoyen」の理想的な結びつきの模索を意味していることが明らかとなった。
キーワード：スイス、劇、精神的国土防衛、武器輸出、反ファシズム

* A professor in the Faculty of Economics, and a member of the Institute of Human Sciences at Toyo University